

2022年コロナ禍3年目「学生と表現の自由」

～ウクライナ戦争・侮辱罪・安倍元首相銃撃事件～

鈴木裕美子

Yumiko SUZUKI

湘北短期大学非常勤講師

Shohoku College

【抄録】 コロナ禍3年目の2022年。ロシアによるウクライナ侵攻、安倍元首相銃撃事件、そして、ネット上に溢れる誹謗中傷に対する「侮辱罪」の厳罰化。学生は『メディア論』の講座を通して、戦争と平和、表現の自由などを自分の問題として考えました。また、本講座では毎年『自分とメディアの関係』を図で表すグループワークを行っていますが、今年度、初めて『自分』の存在しない図を作るグループが出現。情報の渦の中にいる学生の姿が浮き彫りになったかのようです。衝撃的なニュースに溢れた年に学生がどのようにメディアと付き合ったのか、記録します。

【キーワード】 メディア 戦争 SNS デジタルネイティブ コロナ 表現の自由

はじめに。「実際の戦争が教材になる」。

不幸なことです。現実でした。学生はメディア論を「自分が接している戦争を通して学ぶ」ことになりました。2月24日のロシアによるウクライナ侵攻から戦闘は続き事態は悪化し、学生は衝撃的なニュースを受け止めきれない様でした。授業後に提出してもらったアクションペーパーの中で毎回必ず誰かしらが「戦争をやめてほしい」と書きました。そして、彼らはウクライナ戦争の悲劇の中で、日本の歴史『真珠湾攻撃』『玉音放送』を学ぶことになりました。

本講座「メディア論」は情報を媒介する手段としてのメディア（新聞、ラジオ、テレビ、ネット etc）の歴史や役割、報道機関（メディア）がどのように取材・報道を行っているかなどについて知識を深めながら「メディアを通して社会を学ぶ」講座です。今期は戦時のメディアなどを折に触れ解説、言論統制・プロパガンダ・フェイクニュース・情報操作、様々な言葉が飛び交い、2022年前半、刻々と変化する社会と向き合う講座となりました。

1. 学生の「掌の中の戦争」

世界では紛争や武力衝突が数限りなく起きています。今期メディア論を受講する学生は、2003年前後の生まれです。物心つく頃にはイラク戦争は終わっていましたが、アフガニスタンやシリア

の内戦等のニュースに接することはあったはず。しかし、学生にとっては、映像で見る現地の状況ははすでに暴力によって破壊されつくし日本の平和な生活とあまりにもかけ離れていたため、同じ人間がそこで暮らしているという共感をもってニュースを見ることが少なかったのではないかと思います。

ところが、今回のウクライナでは、同時進行的に自分たちと同じような生活が破壊されていく姿を間の当たりにすることになりました。それだけに衝撃は大きかったと思います。「まさか、ロシアがウクライナに侵攻するなどは、合理的には考えられなかった」「軍隊が侵攻し市民を蹂躪する20世紀型の戦争が、今この時代に行われるとは信じられなかった」と専門家は口々に語っています。ありえないことが起きた衝撃も大きかったのです。

しかし、若い人たちが戦争を自分事として考えたのにはもっと大きな理由があると、私は考えます。

ウクライナの映像は同時代の市民の姿を伝えていて日本の若者が共感する部分は多くあった上に、SNSを利用している様子とそのSNSの映像が、どんどん入ってきます。ウクライナの市民はSNSで自らの状況を伝え救援を求めています。マウリポリの製鉄所の地下で水も食料も不足する中で避難生活を送る姿、ブチャの虐殺の無残な傷跡、ロシアに強制移送される住民たち…一般の市民が戦争の悲惨さを直接世界に訴えてい

るのです。若者の掌にあるスマホに直接彼らの悲鳴が、助けを求める声が届いているのです。これ以上、身体的にも身近にある戦争はあったでしょうか。

そして、同時にそれはSNSを武器とする、新しい形の市民の戦争参加でした。

私の本務は深夜の報道討論番組『朝まで生テレビ!』¹の制作ですが、「今回の戦争でSNSが大きな役割を果たしている」と多くの人を感じていることがわかる出来事がありました。

2022年4月放送の『朝生35周年特別企画 激論35年!～戦争と平和ド～する?!ニッポンの針路～』では放送中に視聴者にアンケートを行いました。

質問は『日本が侵略されたら、あなたは戦いたいと思いますか?』。

決して「戦う」こと奨励したわけではありません。ウクライナの市民が武器を持って戦う姿にショックを受けていた若いスタッフが「ぜひ視聴者に聞いてみたい」というのです。議論を重ね、この質問となりました。

電話とファックスによる有効受付数は計329件で、『思う』が176件、『思わない』が125件。『思う』の理由としては、多い順に①自国は自分たちの力で守るべき、②日本国民と文化を守りたいから、③戦わなければ自分の命が危ないから、④日本の将来のために戦わなければならない、でした。

興味深いのは戦い方です。電話アンケートでは『戦う』と答えた方にさらに戦い方について尋ねました。『武器を使う』という答えが81件。『後方支援・経済支援』が30件、『SNSなど言葉を利用する』が22件。「戦う」といっても視聴者には様々な知恵があることが分かりました。

特に、『SNS』などの言葉を利用する、被害の状況を世界に伝える、情報戦に参加する」はまさにウクライナで目の当たりにするものでした。

なお、『思わない』の理由は①命を大切にしたいから、②もう2度と戦争を起こすべきではないから、③国・政府が信用できないから、④戦っても無駄だ、という結果でした。

2. ウクライナのゼレンスキー大統領の演説

① 「伝える」と「伝わる」

各国に協力と支援を求めたゼレンスキー大統領の演説。3月8日の英国議会、15日カナダ議会、16日アメリカ議会、17日ドイツ連邦議会、そして3月23日は日本の国会でリモート演説²を行いました。大統領の演説で特徴的だったのは、必

ず相手の国の歴史、文化などを絡めていたことです。イギリスでは、シェイクスピアを例に引き、ドイツではベルリンの壁を念頭に「ヨーロッパに『自由』と『非自由』に分ける壁が出現した」と話しました。

アメリカ議会では、1941年の旧日本軍による真珠湾攻撃、2001年の米同時テロを挙げ、「無実の人が空から攻撃された事実を思い出してほしい。私たちの国は今、毎日毎晩、同じ経験をしている」と訴えました。

ゼレンスキー大統領はアメリカでの演説では、冒頭部分はウクライナ語で行い、次にウクライナの情勢を映像で紹介し、最後は英語で語り掛け、締めくくりました。制空権を守るための武器の供与も求めました。米国議会は、スタンディングオベーションでこれに応えました。

では、ゼレンスキー大統領は日本では何を語ったのでしょうか。ウクライナで起きている悲惨な状況を説明し、相手国の事件や歴史を重ね合わせる手法は他国での演説と同じでした。

日本では、チェルノブイリ原発事故の脅威を引きながら、直接的な表現を用いないで2011年の福島第一原発事故の恐ろしさを思い起こさせ、同時に原爆投下の悲惨さを訴えました。化学物質の恐ろしさをあげ、婉曲に1995年の地下鉄サリン事件の恐怖を呼び覚ましました。そして、東日本大震災の時と同じようにウクライナの人々が困難な状況に陥っていることを訴えます。

「ウクライナの復興を考えなければならない。避難した人たちがふるさとに戻れるようにしなければならない。日本の皆さんも、そういう気持ちがお分かりだと思う。住み慣れた故郷に戻りたい気持ち」。つまり、福島第一原発事故で故郷を失った人々の境遇と、今のウクライナを重ね合わせていたのです。

さらに、他国には求めた武器供与について、日本には求めていません。平和憲法の下戦後77年間戦争をしなかった日本の立場を理解した上で、敗戦から立ち上がった国、311から復興しようとしている国、「復興の国」と日本を位置づけた演説でした。「将来、反戦連合ができ上がった時、日本がウクライナと一緒にいることを期待している」と結んでいます。

大統領の演説は、相手の国民の心にどうすれば効果的に訴えかけることができるか、相手の社会、歴史、国民性を熟知したものとなっていました。単に「伝える」のではない。「伝わる」ためのスピーチを行っています。

学生は「伝わる」ためには、伝えたいことを明確にし、伝えたい相手のことも理解することが必要なことを学ぶことになりました。

② 「他者の目」で、自国の歴史を学ぶ

演説から学生はもう一つ学ぶ事がありました。

「制空権が欲しい」、大統領は自国の空を脅かされる恐怖をアメリカ人の心に訴えかけるために、81年前の日本を引き合いに出しました。

ゼレンスキー大統領だけでなく、アメリカ人や世界の人々から見れば、1941年真珠湾攻撃をした日本は2022年のロシアと同じ。「あれは追い込まれた末の攻撃だった」とした当時の日本の言い分はあったとしても、市民の立場からみて、世界史に刻まれた日本は今のロシアと等しく、暴挙を行った加害者として語り続けられているのです。

しかし、学生にとって戦争は自分たちが生まれるはるか昔の出来事。中学や高校の歴史の授業で学んでいるはずですが、真珠湾攻撃を「知っている」と手を挙げたのは3分の2でした。

一方で大統領は、日本を「被爆国であり、原発事故で被害を受けた、原子力の被害者である」ことに配慮した演説を行っています。だからこそ、「今、核施設を占拠され、同じように核爆弾の恐怖にさらされているウクライナの市民のことを理解してほしい」と訴えています。

世界の中で、日本は戦争の被害者でもあったし、加害者でもあったのです。日本政府は第二次大戦後、戦後50年の村山談話¹¹¹、戦後70年の安倍談話¹¹²で、過去の戦争について反省を述べています。

日本では、授業で近現代史を学ぶ時間が限りなく少なく、学生は歴史的事実もその評価も知らないまま卒業します。

そんな学生にとって、大統領の演説を通して、かつての日本が世界の中でどう評価されているのか、今の日本がどのようにみられているのか、を知ることになりました。学生は、「他者の目で自国の歴史を見る」ことになりました。混乱する世界情勢の中、世界史の中の日本の姿を学んだのでした。

3. 「侮辱罪厳罰化」と「表現の自由」

本講座では、2019年から毎年ネット上の誹謗中傷の問題を取り上げています。どの学生もイジメは許せないと断言し、ネット上で自分が同じようにイジメにあうことを極端に恐れています。ネット社会が既に存在している中で育ってきたデジタルネイティブの学生ならではの恐怖があることを感じます。

日本は他国と比較して、SNSでは匿名率が高いという調査があります¹¹³。匿名だから、誹謗中傷・名誉棄損が起きやすいという負の側面と、匿名だと自分の意見を表明しやすい、匿名だから弱い立場の人も態度表明ができる、そこが利点で、両

面あるという訳です。もちろん、実名でSNS生活を満喫している人も多くいます。多くの人との交流の中で自分では予想もしなかった様々な考えに接することができる、という利点もあります。

しかし、ネット時代、心ない中傷や批判で傷つけられ命を絶った人が続出。また犯罪被害者がさらに心ない中傷や批判にさらされる現実。

6月13日、侮辱罪厳罰化を含む改正刑法¹¹⁴が成立しました。繰り返される悲劇に、成立が遅かったと指摘する声もありました。その一方、国会審議では憲法に保障されている「表現の自由」が脅かされるのではないかという意見があり、野党の一部や日本弁護士連合会などが反対を表明しています。「表現の自由」を制限する、という課題もある中での成立でした。

改正法成立を受けた当日、2020年SNSで中傷を受けて亡くなった木村花さんの母の響子さん、2019年池袋の暴走事故で妻と娘を失いSNSで中傷された松永拓也さんらが会見に臨みました。

授業では、この模様を報じた6月14日付けの3紙を学生と読み比べました。事実を端的に伝えた朝日新聞。読売新聞は、見出しに木村花さんの名前を大きく掲げました。木村花さんの母、響さんがマスクを外し悲しげな表情を見せる写真を大きく掲載した毎日新聞の記事。

「朝日が一番分かり易かった」「読売は木村花さんの文字が見出しにあって、あの事件だとすぐ思い出せた」「花さんのお母さんは素敵なお人です。娘が亡くなってこうやって戦って法律を成立させました。でも娘は帰ってこない。毎日新聞に載ったお母さんの写真でつらい様子がわかります」。

受講生の中には「木村花さんの出演していた番組を見ていた」「彼女への非難や中傷に溢れたネットを同じ頃に見ていた」という学生が多くいました。「それは耐えられないものでした」と。また、「『3年A組』というドラマのようないじめへの警鐘を鳴らす番組が必要だ」と言った学生もいました。

こんな感想もありました。「子供の頃は、おめーしんじまえ、とか、仲良しでも、けんかでいったけど、これをネットにあげると、残るし、イジメになるんだ。だからこれからは、言葉にも気を付ける」。「私は、ネットに記事を上げる時に、まず一呼吸おいてからアップします。『いいね』を押す時も考えるようにしています」。

彼らは、おおむねこの法改正を支持している様でした。

授業後のリアクションペーパーから抜粋します。

◇表現の自由には、メリットとデメリットがある

ことを改めて感じました。多くの人が声を上げやすい環境になった反面、SNSの普及とともに、名誉棄損・誹謗中傷も増えてしまっています。SNSはとても便利なものだけど、使い方を間違えると凶器にもなってしまう事を忘れずに、正しく使うことが大切だと思いました。

◇急速にインターネットが普及して表現の自由が目に見えるようになってきている世の中だと思います。自分の好き嫌いを自由に発言でき、それに賛同する人が多くなればなるほど、それをうける芸能人の方は心が痛むと思います。今回の法律が成立することで「表現の自由」が脅かされると指摘が相次いでいる、というけれど、見ず知らずの人から中傷を受けて亡くなった人も少なくない問題で、世の中の人にもモラルが欠けていっていると思います。言っていること、悪いことを、このインターネットを通じて教育していく必要があると思います。

◇SNSなどで中傷されることがないようにするための侮辱罪は必要だと思いますが、その法律が、日常生活で普通に話す言葉などまで厳しく制限されてしまうようになったら怖いな、と思いました。

◇2年前誹謗中傷が原因で自殺を図った木村花さんが転機となり、先日侮辱罪厳罰化がされた。私は表現の自由と中傷の境があいまいな世の中であることを問題視すべきだと感じた。私が考えるに「表現の自由」は本人に関わる政治的、生活や就労に対する反対意見を言える権利、中傷を主旨にしていない自己表現を差しているのだろうと思う。SNSの中傷は、文字として残るため、口で言われるよりも、心の傷が消えづらいことだろう。中傷者を特定しやすいように、よりSNSの運営会社には、開示に対して協力的になって頂くことも必要だと感じた。

4. 安倍元首相銃撃事件の衝撃

① 学生は身近の人の死として悼んだ

7月8日。あってはならないことが起きました。安倍晋三元首相が奈良市での選挙応援演説中に銃弾に倒れたのです。翌週の授業で「安倍さんの一報を知ったのは、母からのラインでした」と答えた学生が6人。Twitterで、ニュースサイトで、テレビのニュースで。安倍元首相銃撃事件の衝撃が学生を襲いました。「私達の安倍ちゃん」。学生は物心ついて以来総理と言え「安倍さん、あべ

ちゃん」でした。

「あべちゃんは私たちのためにバラエティ番組に出てくれた」「安倍総理は、日本の為にたくさん外国にいて日本を外交大国にした」「安倍総理の時代は長かったから、総理と言え「安倍ちゃん」。メディア露出が多かった総理に対する親近感でしょうか。

こんな学生もいました。「(授業で)安倍首相の話聞いていて、気分が悪くなったので、少しくるしかたです。嫌な気持ちになる人もいるので、メディア論にとって大きな出来事だけ考えてほしいです。」この様に、ほとんどの学生はまるで身近な人の死にうろたえる様にうろたえていました。

学生の多くが初めて選挙権をもったのは、奇しくも今回の参議院選挙でした。とはいえ、彼らが特に政治に興味があるとか、安倍元首相の政治的信条や政治家としての実績などを知っているという訳ではありませんでした。

「参院選の最中の暴力、言論封殺、民主主義への挑戦だ」と怒る大人たちの感覚とはまったく異なる次元から、学生は安倍元首相の死を受け止めました。そこには、身近な人の死と率直に向き合う感覚がありました。

一体何が起きたのか、彼らは情報を求めてニュースを見続け、その挙句、そのニュースを見るのが嫌になったにもかかわらず、自分から情報を遮断できない状況に陥っていました。

① 何を表現し表現しないのか。

「取材すること」と「報道すること」

授業では、新聞6紙(7月9日付朝刊)を並べて比較しました。事件の大きさを物語るように、大見出しの文字が全て同じ。見出しは一言一句同じ「安倍元首相、撃たれ死亡」でした。



見出しは全て同じでしたが、掲載された写真は社によって違っていました。

読売新聞は「銃撃に倒れ、救急車で搬送される安倍元首相」。産経新聞は「銃撃を受け、路上に倒れた安倍元首相」。毎日新聞は「銃撃に倒れ手当てを受ける安倍元首相」。(毎日新聞は写真の一部加工しています。とお断りを入れています。おそらく、血痕をばかしたのだと推測されます)。

銃撃に倒れた安倍元首相の、ある意味では生々しい写真を掲載した3紙について学生の半数近くが反応しました。「安倍元総理の倒れている写真は見たくない」と、何人もが言いました。

しかし、凶弾に倒れたのは事実です。「報じる必要がある」と判断したうえで、読売新聞・産経新聞・毎日新聞は掲載したのです。

報道現場で長く働いている私は、どの写真を掲載すべきかすべきでないか、それぞれの社が真剣に検討している様子が目に浮かびました。

何を表現し、何を表現しないのか…。

取材したからと言ってすべてを報道することはありません。

例えば、東日本大震災311の際。海外にいた人たちはBBCなどの国際放送を通して津波に巻き込まれる人の姿をはっきりと映像として見ていたと言います。しかし、日本のテレビではそのような映像は流れていませんでした。この時、日本のテレビ局では、津波に巻き込まれる人影がもし自分の家族だったら、視聴者はどう感じるのか、映像を受け取る側の痛みを考えて、あえて映像を流さないという判断をしています。

一方で当時はこんな指摘もありました。「テレビは人々を巻き込む津波の力、自然の威力をしっかり見せることをしなかった、客観的でなかった」。さらに「被災者感情を重視するあまり、過去の津波の恐ろしさを忘れて海の近くに集落をつくってしまった結果が招いた悲劇であるなど、事実から目を背けることで、今後の被害拡大の抑止力を失わせた」。

あの時は日本全体が大震災の被害者でした。「これ以上悲惨な映像は流さない。流せない。」報道側にはそんな気持ちがあった事も事実です。報道する側も人間、受け取る側も人間です。これを自主規制と呼ぶのか、配慮と呼ぶのか…。

テレビ局や新聞社などの報道機関は、何を報道し何を報道しないのか、どの映像を流すのか流さないのか一定の基準を設けています。

日本国憲法、放送法、民放連の基準、各社独自の報道指針。報道機関は出来事が起きるたびに何を報道するかしないか、常に個別に判断しています。取材はしても報道されないものもあります。

多くの場合、交通事故や犯罪被害者の映像、遺体の映像などは、人間の尊厳にかかわるものとし

て報道されることはありません。これは、死生観も含めた日本の文化にも根差していますし、日本社会もそれを求め、許容してきました。

その暗黙の了解を越えたのが、安倍元首相銃撃事件でした。安倍元首相が銃弾に倒れた直後の様子が新聞に掲載され、テレビで流れ、SNSで拡散されました。「見たくないはず」の映像が、瞬間に社会の中に流れてしまったのです。

平和な日本で、選挙中に、長くリーダーを務めた安倍元首相が撃たれる、という衝撃の事実を、社会全体が映像で確認したのです。

リアクションペーパーを見てみます。

◇安倍さんの件についてですが、私はニュースアプリの通知で知りました。友人とその件をお話した時「Twitterとか動画とか上がっているから気を付けてね」と言われました。その時はTwitterだからな…と思って見ないようにしていました。ですが、家でニュース番組を見た時、かなりショックを受ける映像、写真が映されていることがわかりました。なんで…とすごく疑問でしたし、怖くて怖くていまだにこの事件は詳しく見ていません。とても大変な事件なのは重々承知です。ですが、なぜ、小さい子など誰もが見ることでできる媒体で、時間で、流すのでしょうか。いつも、人が亡くなる事件ではこのように流さないのに…。私も怖いですし、他人によってはトラウマになってしまうのに…と思いました。・・・

この学生は「ネット上は無法状態でも、テレビでは規制があり悲惨な映像は見ることはないと思っていたのに、裏切られた」と思っています。一方で、こんな意見も。

◇安倍さんが亡くなった次の日の新聞は安倍さん関連の情報がたくさん載るだろうと思っていたけれど、6個の新聞社の見出しがここまで一緒のモノで驚きました。わざと合わせたのかとも思っただけです。それくらいの事件だったんだと思ひ知りました。…

◇私は安倍さんの事件はあってはならないと思います。毎日新聞や産経新聞や読売新聞は少し刺激が強い気がしました。こーゆー写真を見るだけでも、かなり悲しい気持ちになってしまうので、東京新聞や日経新聞は朝日新聞の見出し(写真)がとても良いと思いました。

学生たちにとって身近な存在だった安倍元首相。リアクションペーパーを読みながら、「事実だとしても凶弾に倒れた姿は見たくなかった」と

いう気持ちが理解できるような気がしたものです。

東京・芝の増上寺で営まれた安倍元首相の7月11日12日の通夜・家族葬には、多くの人々が別れを惜しみ長い弔問の列が続きました。そして、その後、国論を二分することになった9月27日の武道館での国葬^{vii}（この国葬は、70年に及ぶ治世を全うされたイギリスのエリザベス女王の国葬^{viii}と比較されることになりました）を経て、秋になった頃、あの時の報道の検証が始まりました。

読売新聞社の新聞報道に関する世論調査^{ix}では、銃撃後の安倍元首相の搬送写真を掲載したことが妥当か否かについての問いがありました。

（2022年10月13日付）

「掲載を妥当」としたのは69%、「妥当ではなかった」が28%。

読売新聞は「歴史的な事件を克明に記録する重要性を、多くの人が支持したといえる。」と説明。さらに、年代別にみると60歳以上で「妥当」が75%。40～59歳では69%、18～39歳では59%だったそうです。

そして本文では「事件事故の報道では、通常は遺体や生々しい血痕などがうつった写真の使用を控えるが、事案の重要性や歴史的意義を踏まえ、例外的に報じる場合もある」と解説しています。

読売新聞は、歴史的な事件をどう扱ったか、その反響はどうか、など自己検証し、社の姿勢を示しました。新聞は社会の公器であることを自負した有意義な調査でした。私も「妥当」と考えた大人の一人ですが、社会がそれを「是」としたのだと知ることができ、なおかつ、世代的な差が大きかったことを知ることができました。

② 学生の疑問「なぜ、『宗教団体』の名前がなかなか報道されなかったのか」

数人の学生から「なぜ宗教団体の名前がすぐ出てこなかったのですか」「“付度”や“圧力”や“自粛”があったのではないですか」という声が上がりました。

この疑問の背景には、若者の社会やメディアに対する不信感があるようです。森友・加計学園事件では『安倍首相に対する付度があった』と度々報じられ、権力者に対する付度が世の中ではまかり通っていると学生は考えていました。

そこにメディア不信が重なります。NHKの予算は国会で審議されるため『NHKは政府与党に圧力をかけられている、だから、政府寄りの報道をするのではないか』云々。また、『メディアの過度な自主規制“や“自粛”が報道の自由を損なっている、メディアは腰抜けだ』等。

そして、もう一点。学生はネットで検索すればどんな疑問でも瞬時に答えが見つかると考えている様です。つまり「調べればすぐわかるはずなのに…何か隠しているかも。さては、付度か圧力か自粛か？」という訳です。

事實はどうだったのでしょうか。私は自分が取材する立場であれば、この取材には時間がかかることは容易に想像できました。

「実際がどうだったのかは、私にはわかりませんが」と断った上で学生に説明にしました。「皆さんが取材者だとしたら、どう取材しますか？」「容疑者は事件直後逮捕されて警察にいて私たちは接触することができません。容疑者に直接取材することはできないから、警察の発表を待つか、独自に周辺をあたるしかありません。」この説明で、学生は取材には時間がかかりそうだと少しわかるようになります。

「また、警察は捜査の都合上、容疑者の供述をすべてメディア・報道機関に発表するわけではありません。報道機関は限られた情報をもとに独自で取材にあたります。容疑者の家族、友人、会社の同僚ですね。関係者も誰がどこにいるのか、調べるのに時間がかかります。関係者に接触できたとしても取材拒否をされるかもしれませんし、取材ができたとしても、その情報には裏付けが必要です」「今回の容疑者の場合は親戚の方が容疑者の生い立ちや今回の事件の動機について話していましたが、その話が事実かどうか確認する必要があります。記憶が曖昧だったり、具体的な固有名詞が違ったりしたものをそのまま報道するわけには行きません。」成程、正確な情報を流さないといけないから取材や確認作業は必要だなと、学生は納得したようです。

「今回の場合は、親戚の方から宗教団体の名前が出てきました。そうすると次に、その宗教団体にそれは事実かどうか確認する必要がありますね。団体名を曖昧にして『ある宗教団体に恨みがあった』と報道すれば、その宗教団体のみならず他の宗教団体が疑いの目をむけられることになり、社会が大混乱しますね」。

取材の基本である原点にあたれない今回のケースのような場合、事実確認を行うには時間がかかることが学生にも想像できるようになりました。

私にとっては、ネット検索とは違う、現実から情報を得る手間や時間、確認作業などの「取材の基本」を説明する機会になりました。

リアクションペーパーです。

◇宗教団体をどうして報道しないのだろう、と私も疑問でした。ですが、「事実がどうかかわからない」「確認されていない」という理由も考えられ

る、と言うお話に納得するものがありました。「(報道は) 圧力などに負けている!!」という疑問が頭の中で、固まってしまっていたな、と反省です。

◇世に情報が出るまで、事実かどうか確認したりするなど、裏で色々おこなうことがあることを知って確認作業が多いので、(逆に) 情報が出る速さがすごいなと思いました。

さて、授業では私は「取材の一般論」を説明しただけで、今回の事件で「特定の宗教団体の名前」が実際に伏せられたのかは不明なままでした。様々な憶測記事も出回っていました。私も何が事実なのか気になって警察発表や現場の取材がどうだったのか調べましたが、全体像を結ぶ所まではいきませんでした。

2023年1月。朝日新聞が「深流 安倍氏銃撃から半年」のシリーズ企画を掲載。8日付の一面の記事の大見出しです。『銃撃30分後 教団名を供述・戸惑った警察、伏せて会見』。

記事には「奈良県警が当日夜に行った会見では『旧統一教会』の名称は伏せられた。報道陣に対して公表された動機は『特定の団体』への恨みだった。」(中略)「当日夜に予定される記者会見に向け、動機の部分をどう説明するか警察内部で検討が進められた。事案の重大さを考えると、動機面を全く明かさないと対応は取れない。だが、供述では明確に語られているものの、教団との関係がきちんと裏付けできていないこの段階で教団名を出すのは適当でない。『宗教団体への恨み』と公表すれば、ほかの宗教団体が連想されてしまう。公明党の支持母体が創価学会であることを考えると、選挙の公平性、中立性に影響を与えかねない。」(中略)「県警はその後『特定の団体』が教団であることを正式には公表していない。

学生たちの疑問は「メディア不信」から発せられたものでしたが、『団体名』を伏せたのは、容疑者の話を直接聞いた警察でした。報道側は記者会見で団体について追及していますが、警察は答えていません。「確認が取れていないから」「選挙への影響を考慮して」がその理由でした。

警察としては、供述が取れたとはいえその真偽を確認する必要がありました。その上、組織的な犯行の可能性も捨てきれない中、第2第3の凶行に備える必要もありました。当日の記者会見で警察が「特定の団体名」を伏せた状況が見えてきました。

その後、警察が伏せた団体名が、各報道機関の取材によって明らかになり、旧統一教会の問題が社会全体を巻き込む一大騒動となっていきました。

しかし、今も当局から正式発表がないという事

には驚きを禁じられません。

1月8日、容疑者は起訴され、裁判員裁判で裁かれることになりました。事件は司法の場に移り法廷で事実が明らかになっていくことでしょう。

「誰が、何故、団体名を伏せたのか」。学生からの疑問が解けたのは半年たってからでした。朝日新聞については容疑者が立件されたことを契機に報道された記事で遅すぎたのではないか、という指摘もありましたが、仮に時間がかかったとしても、この様に事実を明らかにし、後世に残すことには意味があります

「銃弾を受け搬送される安倍元首相」の写真の掲載の是非を世論調査した読売新聞。そして、容疑者の動機の解明につながる団体名がどう扱われたのか、経緯を明らかにした朝日新聞。私は自己検証や調査報道の重要性をあらためて感じました。こういう形で、読者視聴者とキャッチボールを行うことが「メディア不信」を払拭し、「メディアへの信頼回復」の為に大切な事だと感じています。

私の学生はこれらの記事をどこかで読むことがあるのでしょうか。ふだん新聞は読まない彼らですが、ネット転載された記事を読むことを期待しましょう。

5. 「ネット社会で あなたは自由になりましたか？」

① 通信障害と社会。

2022年の前半は各携帯電話会社で大規模な通信障害がありました。その度に監督官庁である総務省は原因追及や改善策を各事業社に求めていましたが、トラブルが次々と起きました。ネット社会のハード面の課題です。

特に、学期の中盤におきた携帯電話大手のKDDIの障害は大きいものでした。7月2日未明に起き、音声通話・データ通信共に全国的にほぼ回復したのは5日の夕方。復旧のめどがたったのは障害発生から62時間後。携帯電話だけではなく、生活に身近なサービス、企業の業務の利用にも影響が及び、通信が社会のインフラであることを人々は思い知ることになりました。

「巻き込まれて大変だった」という学生もいました。「お母さんと連絡が取れなくなった」「コンサートのチケットが購入できなかった」「電車が遅れた」「就活先の面談申し込みができなくなりそうで怖かった」など、生活のあらゆる面で不便が生じました。デジタル社会・ネット社会の便利と不便は表裏一体であることを学生も多くの人も実感せざるを得ませんでした。

総務省によれば、固定電話を保有している割合は10年程前は約8割。2021年には66.5%に。世帯主が20～29歳では9.5%。若い世代は携帯しか持たない人が大半です。社会全体がデジタル化していく中で事業者の責任は重くなっています。

授業の中で、私は「通信の代替手段を常に考えておく」とか「必要な電話番号や住所は覚えておく」とか「個人の生活の中でどこまで防衛できるか考えておかないといけませんね」と当たり前のことを話すしかありませんでした。

② 通信網への依存と「情報中毒状態」

それにしても今期は通信の役割の重大さを実感させられる日々でした。ウクライナの市民が自分たちのメッセージを伝えるのに使ったのが、イーロン・マスク氏率いる衛星会社スターリンクでした。マスク氏はウクライナの要望に応え衛星を使用できるよう協力、この衛星がウクライナの惨状を人々の苦悩を、世界に、そして私の学生に届ける役を果たしました。(マスク氏は、Twitterの買収でも2022年中世界の耳目を集めました)。

4月、知床の遊覧船カズワン¹が沈没。痛ましい事故でした。遊覧船の運航会社の体制の不備が伝えられる中、連絡用の衛星電話が不調だったことも分かり、救助が遅れたことも判明しました。学生は通信の発達段階の初期に、無線が船舶通信に有用だったことを学んだ直後に起きた事件だったため、ことのほか興味をもってこの事故を受け止めました。

そして、上述したように、auの大規模通信障害が人々の生活を混乱させました。

身近なところでは、「私は無線は便利だと思う。有線だったらケーブルがぐるぐるになって音楽が聴けない、無線のイヤホンは最高です」という学生も。

私たちは多かれ少なかれさまざまに無線を使い、膨大な通信網というハードに支えられて日々を送っています。

一方、今期は、膨大な通信網から流れてくる情報を自主的に選別することができない、という学生が多くいたのも特徴的でした。情報は欲しい、だけど、情報を取捨選択する能力がついていかない…。ある日の授業でやり取りです。

「ずっとずっとニュースがあって、もうやめて！と言いたい」という学生がいました。

「もうやめて！」…ならば、「ネットは見なければよいし、もしそれがテレビならスイッチを切ってしまったらいかがですか？」と私。

「でも、テレビではずーっとニュースをやってます」と学生。「新しいニュースを知りたかったら定時ニュースを見れば5W1Hは分かります。新

聞でもテレビでも報道機関はある時間を決めて情報をまとめ内容を吟味精査して出稿します。大きなニュースは瞬時に速報という形をとりますが、朝昼夕夜と生活に合わせた定時にニュースをまとめて出すのが基本です。ワイドショーなどは、ニュースをより深く知りたい人のために分析・解説・論評をする視聴者の興味に応えるための番組です。もしニュースのポイントだけを知りたければ、定時ニュースを見ればほぼ事足りると思います」。

ここで、学生はちょっとびっくりします。

「え、テレビをきるんですか。」「そうですよ。見たくないものは見なくていいんですよ。」ニュースを受け取るか受け取らないか、自分が判断すべきなのに、そう思えない精神状況があるのか、と私も面食らってしまいました。

たしかに、テレビではワイドショーも情報番組も何かしら新しい情報を加味して“ニュースのその後”を放送しています。最新の情報を知りたければ「テレビをつけっぱなしにして、それを見続けてしまう」のが当たり前のようにしている人もいます。

現実には、学生の場合はテレビを持っていないこともあり、ネット・ニュースを追い続けてしまうのでしょうか。ネットを見れば、新聞社やテレビ局のニュースを転用したネット記事にあふれています。「ネットを見続けてしまう」。いわば、「情報中毒状態」です。

「情報の取捨選択は、自分の判断で」ということは簡単ですが、私には、学生が情報の遮断を上手くできないことは容易に理解できました。

おそらくこれは、2020年のコロナという未知の感染症におびえ、コロナ下の感染者数の発表、緊急事態宣言の発出などを、息をひそめるかのように注目してきたことの名残り、いわば習慣ではないでしょうか。

コロナ下では、多くの学生は信頼できるのはテレビのニュースだと考えていました。ネットのニュースを中心にしていた学生の中でも、ネットのニュースの出典がテレビや新聞かどこが信頼できる発信元か確認しながら、情報の選別を行いながらコロナ関連の情報を求めていたのです。

2021年後半にはワクチン接種も進み、コロナが未知の病ではなくなっていくにつれ、徐々に息をひそめて次なる情報を待つ、というような気分はなくなってきていました。

しかし、2022年の2月24日ロシアによるウクライナ侵攻があって、世の中が2020年コロナ感染の当初の頃に戻ってしまった感じがしたものです。

まるで20世紀のような戦争、専門家も予想外だったという侵攻の映像に人々はくぎ付けにな

りました。2月から3月にかけて、朝から晩まで、ウクライナ侵攻のニュースが流れて、人々は市民たちが巻き込まれていく様を見続けました。

安倍元首相の銃撃事件はさらに拍車をかけました。「もっと知りたい、もっと新しい情報を知りたい」そんな欲求が中毒のようになってしまい、自分が情報の受け手で、情報を受けるか受けないか、判断する主体であることを忘れてしまいそうな学生。これでは「ネット社会で自由になった」とはいえません。2022年ならではの外的環境が学生を混乱に陥れていました。

③ ネット社会で自由になったか、ならないか。

授業も後半戦。朝日新聞の『BIG TECH 膨張する権力 わたしのデータ 利益の源泉』(6月15日付一面)^{xii}という記事を学生と読むことにしました。記者の体験談なども交え書かれているので学生には読みやすいだろうと、考えたのです。

ネット時代の学生に新聞ばかり読ませるのもいがかたという思いもありましたが、新聞は手にとって読むことができ、文章も音読させるのにちょうどいい分量で教材としては悪くありません。何より本講座は「メディア論」ですから、新聞など読んだことのない学生にとっては「新聞ってこんなものなのだ」と知る良い機会にもなっていると思います。

記事の冒頭。「ビッグテックと呼ばれる巨大IT企業で、年間数十億円稼ぐ米グーグルやフェイスブック(FB 現在メタ)は広告ビジネスに支えられている。その利益の源泉は、私たち利用者の膨大なデータだ。データはどう集められ、どう使われているのか。」

記事には、データがお金に代わるデジタル広告の仕組みなどが図入りで解説されています。記事は続いて「あなたがどこにいて、ネット上でどんなサイトを訪れたのか追跡し、どんな商品やニュースに関心を持ったか、多くの業者が『プロファイリング』をしている。扱うモノやサービスに関心がありそうな人に狙いを定め、広告を出すのに使われているのだ」。

記事の後半では「プライバシー保護の機運の高まりを受け、デジタル広告市場では「地殻変動」が起きている」「(アップルのプライバシー保護への取り組みを発端として)グーグルやFBは最近、利用者が自分のデータの取り扱いを選べる機能を導入するなどプライバシー保護の姿勢を強めている。だが、利用者の『信頼』を得るのは容易ではない」とありました。

読後、学生に尋ねました。「ネット社会になっ

て、あなたは自由になりましたか?」。

「自分のデータが悪用されたら困る」「自由どころか自分の利用履歴・データが丸裸にされて、監視されているみたいで怖いです。全然、自由じゃないです。」「自分のためにカスタマイズされたものばかり見ていると自ら動く力や考える力が落ちそうで怖いです」「スマホは便利な機能が備わっており、ネット社会になって良かったと思えますが、反対にネットに支配されてしまい、気が付かないうちに自由が制限されてしまっているかもしれない、と考えました。」「auの通信障害の時に、スマホが使えなくて困りました。なくてはならないものだけど、スマホがあることが当たり前で、なくなったら怖いと思ってしまいました。スマホにこんなに依存してよいのか、不安が募ります」など…。記事を読んだ直後なので、困惑気味の声が多く聞かれます。

この日の出席者は31人。改めて挙手を求めました。「ネット社会になって自由になったと思わない人は?」12人。「自由になったと思う人は?」8人。態度保留は10人近く。

「自由になった」と答えた人に聞いてみました。いつもはおずおずとしか意見を言わない学生が多いのですが、「自由になった」と答えた学生は伸び伸びと手を挙げはつきりと意見を述べました。

「自分の好みを覚えてくれて検索がしやすい」「どんどん便利になるから、自分の好きな世界を追求できます」「時間が無駄になりません」「プライバシーは今後保護されていきます。心配しません」。デジタルネイティブらしいネット社会を我が物として自分の人生にプラスにするという発想に、否定派の学生の中にもうなずく姿が見られました。

授業後のリアクションペーパーです。若者らしい表現も含め興味深いのでほぼ全文紹介しましょう。まずはネット社会に対する「肯定派」から。

◇ビッグテックと呼ばれるグーグルやフェイスブックは現代のネット社会で我々人類を牽引してくれている、今となってはなくてはならない存在だ。私もその一人として毎日利用している。しかし、快適に利用できている背景に我々の個人情報や履歴データを用いていることに衝撃を受けた。人によっては不快に感じるだろうが、自分はそう思わなかった。効率的にユーザーが興味ある広告が表示させられることは素晴らしい事である。どちらにせよ、ビッグテック側に我々ユーザーの個人情報、履歴データが管理されることに変わりはないので、私個人の意見としては「流出しなければ、有効活用しても良い」と考えている。

「ネット社会で自由になった」というこの意見の持ち主は、技術の進歩を社会の変化ととらえ、そこに前向きに参加していこうという意思が感じられます。それにしても「ビッグテックは人類を牽引してくれている」とは、なかなかの表現です。

さらに、次の学生は「恐怖」を乗り越えていく決意です。

◇私はネット社会になって自由になったと思います。声を上げる事すらゆるされなかった過去があるからこそ、今、誰でも大衆に向けて意見が言えるようになった、と思います。ですが、自由になりすぎたことで、必要のない恐怖が増えたことは事実です。自分たちが求めて自分たちで作った便利ツールを正しく使うことが未来が明るくなる一歩だと思います。

この学生のいう「声をあげる事すら許されなかった過去があるからこそ」というのは、#MeTooや、#ブラック・ライブズ・マターなど、今までは声を大にして言うことができなかった想いを、SNSがあるからこそ発信できて大きくなった社会運動をさしているのでしょうか。2019年、2020年あたり、今期の受講生たちが高校生の頃の動きです。

#「保育園落ちた、日本死ね」はさらに数年前になります、強烈な一矢でした。まさに、SNSは個人が多くの人にメッセージを届けることができることを証明したトピックでした。

女性活躍を歌いながら、現実には働く母親・女性のための制度が整備されていない日本社会の矛盾を問う怒りの声でした。国会でも、女性の気持ちを代弁する言葉として取り上げられました。ネットであれだけ拡散されていなかったら、子供が保育園におちた一人の母親の気持ちを誰が気に留めていたのでしょうか。「誰でも大衆に向けて意見が言えるようになった」という学生の考えには肯けます。

この学生はこうも続けています。「自由になりすぎたことで、必要のない恐怖が増えた事は事実です」。そうです。声を上げることは恐い、その先に何があるかわからない。

でも、この学生は覚悟を決めたようです。「自分たちが求めて自分たちで作った便利ツールを正しく使う」ことで、「未来が明るくなる」と宣言しているのです。デジタルネイティブである彼ら、そして、若さのもつ強さに嬉しくなります。

さて、次の意見はクラスの大半を占めていた気分、「不安派」を代表しています。

◇日頃、疑問に思ったことやわからないことがあった時に、すぐグーグルやヤフー、Instagramなどで調べます、その際に自分が調べて開いたサイトが誰かに見られているのだろうか、考えたことがありました。位置情報データでは自分が何時何分にどこにいたのかが記録されたり、自分が見ている広告とみていない広告が記録されている事をはじめて知りましました。見知らぬ誰かに自分の人生を監視されているかのような感覚がして、少し怖いと思いました。個人のデータが記録され広告主などの貴重な情報となるということを知って、私たちは自由とは言えないのではないかと、思いました。ネット社会であることには、すぐに知りたいことが知れたり、他人と簡単につながれたりとメリットは多くあるが、メリットが多くあるからこそ、完全に自由ではないと考えました。

最後に紹介する学生は、ネット社会の実態はリアルな社会が、人間が、支えていることに気が付きました。

◇ツイッターやインスタグラムを見ると流れてくるCMや広告、それはどのような仕組み、流しているのか、今回分かりました。広告の重要性を知ったと同時に少し怖かったです。私たちの情報が商品化されてそれが売買される、まるで映画みたいな話で驚きました。けれど、中には「便利だと思う」という意見の人もいて、私の考え方の視野が広がりました。最近ニュースで流れるKDDI通信障害では、私自身auユーザーではなかったものの、友達やネット界限では大きくなっていて大変で不安に違いないと思いました。それ以上に大変なのは、その通信障害を治す人たちだな、と思いました。今回のことで、たくさんの事やモノに影響が出ていた。社会がネットとともに動いているのが目に見えたようでとても興味深かった。

私は、この学生が働く人への共感をもってネット社会の実像をとらえていることに感心しました。「人がいて、社会がある」。当たり前のことを実感しにくい時代になっても、このような見方ができるとは、頼もしい限りです。

6. 2022年の「自分」と「メディア」の関係は？

① 「メディア・パズル」で「自分」を描く。

毎年、本講座ではメディアの歴史や特徴・役割などを一通り学んだ後、「自分とメディアの関係」を図にする「メディア・パズル」という数人での

グループワークを行っています。

かつて私は別の大学で放送番組論を担当。その時は「テレビ・パズル」^{xiii}として「自分とテレビの関係」をテーマに図にしていました。

その講座の5年間も、湘北短期大学での2019年と2021年（2020年はコロナ禍でリモート講座だったため図の作成はなかった）、学生はワイワイガヤガヤと実に楽しそうに共同作業を行いました。特に、「自分」を図全体の中でのどの位置に置くのか、「自分」をどう表現するのか、可愛い女の子を描いたりして、かなり「自分」にこだわりを見せていました。

今年も例年のように「自分がメディアと思うものを7つ挙げ、その特徴を考え、自分との関係を図にしてみてください」と学生に促しました。

ところが、今年初めて、「自分」を描かない班がありました。「自分」が一切描かれていないのです。「自分をどう描いたら良いか、どこに描いたら良いか」メンバーはわからないと言うのです。

他の班では、メディアの特性を詳細に分析し整理された一覧表の中心に自分マークを置いたり、ネットに囲まれている自分を可愛い漫画で描いたり…。どこを探しても「自分」がない班はこの班だけです。

私はこの時「ついに、この子たちは氾濫する情報に飲み込まれてしまったのか」と悲観的になってしまいました。

そこであらためて、過去の図を遡ってみたところ、2021年にも自分の姿が描かれていない班がありました。様々なメディアの特徴を挙げながら図全体を「受け身」「自発的」と仕切っていて、大きな模造紙そのものが「自分」をあらわしたものでした。その図は「自分」にはメディアの情報を能動的に取りに行く面と、受動する面があるのですよ、と、表現していました。この時の発表で、学生が「自分」というものをしっかり打ち出した説明をしていた為、「自分」の姿が描かれていなかったことに、私は気が付かなかっただけでした。

【写真①】メディア・パズルでは「自分」を中心においた図が多い。



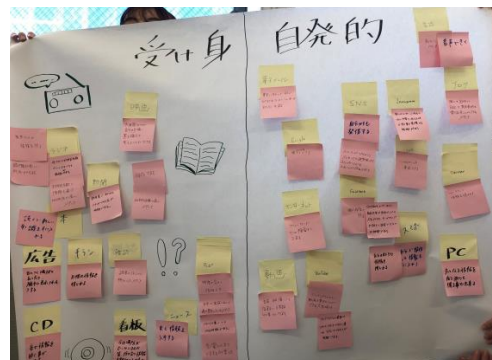
【写真②】2019年「可愛い私」が中心に。



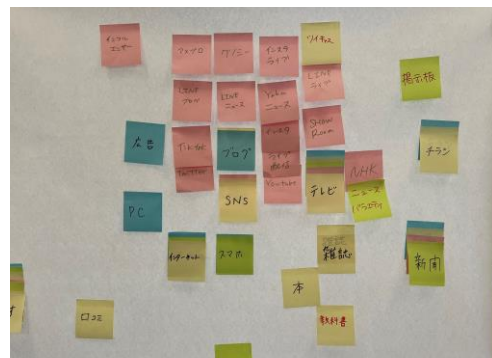
【写真③】2021年「Me」の関心はあちこちに。



【写真④】2021年「自分」は描かれていないが、『受け身・自発的』とメディアに対する態度を示し模造紙全体が自分を表している



【写真⑤】2022年「自分」の姿はどこにもない。



今回、「自分」を描かなかった班の模造紙の上にはばらばらと各メディアが表示され、どうやら自分の中に色々な情報をもたらすメディアがあるかのようです。ただ、その班のメンバーは自分

たちが作成した図について、何故そういう図を作ってしまったのか、発表の際に的確な言葉で説明することができませんでした。好奇心いっぱいの学生、いつもおしゃべりが止まらない学生もいる班だったので、私も論評に困りました。あの図は一体何を意味するのか…。

様々なメディアが「自分」に内在している…。2021年に「受け身・自発的」と書いた班と同じように、あの模造紙全体が「自分」なのだろう、あの図をそう判断できるようになったのは、講座が終わってから半年以上たってからでした。戦争さえ掌の中の情報となった学生。遠く離れた国の戦争も自分の掌の中にある。メディアは肉体と共にある時代。

発表の際、何をどう説明してよいのか困ったような表情を見せたあの班のメンバー。今考えれば常にスマホを握りしめている彼らには、テレビや新聞からのニュースも友達との連絡先も世界中の楽しい動画もお洒落も音楽も自分のスケジュールも…全てが自分の中に収まっている、メディアが自分の中にあることが日常なのです。その日常が当たり前すぎて説明できなかつたのではないか、と思い至りました。

ネット社会、特にスマホのある中で成長した彼ら。2015年のスマートフォン発売は、彼らが中学生の初めの頃でした。彼らと私の常識に隔たりがあることにも気づくことにもなりました。

② 「SNS」だと「自由に言える」。?!。

戦争中はどの国でも極端な言論統制が行われます。1937年に日中戦争がはじまり、39年には戦時統制「国家総動員法」が成立。41年1月には、「新聞紙等掲載制限法」ができ、同じ年の12月に真珠湾攻撃があり太平洋戦争に突入していきます。日本でもアメリカでも大型の台風が来た時以外は、天気予報すら、戦争遂行上の秘密情報とされ報道することができなくなっていました。

新聞は大本営発表にしたがい、敗北撤退を「転進」、全滅を「玉砕」と言い換えをしました。人々は、自分の意見を言う事がはばかられました。

学生は、今のロシアを通じて戦争中には「言論の自由」がないことを実感していました。

しかし、今の日本では「言論の自由」は保障されています。

それなのに「何故?」と、私には疑問に思う事がありました。

上述した通り授業では、前回の授業に提出されたリアクションペーパーを読みながら復習をしています。リアクションペーパーには何を自由に書いても良い、と言っています。実に多種多様な感想や意見がありました。授業の終わりの10分

ほどの短い時間書いたとは思えないほどのまとまった文章を書く学生も多くいます。同じ授業をとっている仲間の意見を聞くことができ嬉しかったという声が多くあり、私も楽しみながら紹介しているのですが、次の意見には少し驚きました。

「今の私にとってこの授業はソーシャルメディアのようなものでした。」

この学生は授業を評価してくれてようなのですが…。

「自由に意見が言えて仲間の意見をたくさん聞くことができ、有意義な時間でした」とありました。「ソーシャルメディアと同じ」はこの学生の「誉め言葉」でした。

「それでいいのかな」と私は疑問を持ちました。家族や友人や学校の仲間とは、お互い意見を交わすことはないのかな、と。

これは、「ソーシャルメディアでない」と自由に意見が言えない」ということかな?。

毎回、視野が広く明晰な文章を書いていたこの学生が、リアルな社会では自分の言葉で話すことができない社会なのかな、と。

「SNS」だから「自由に言える」。ん?。

「実生活での会話」は「自由に言えない」?!

③ 「コロナ禍の青春」と「自由」

あらためて今期の受講生2年生の過ごした時間を振り返ってみましょう。

彼らは2020年4月に高校3年生になりました。高校生活の最後、これから受験勉強という時に緊急事態宣言下、コロナが重く日本全体を覆い始めた年でした。学校も長く休校になりました。甲子園(全国高校野球大会)も、史上初、春夏連続中止となりました。クラブ活動も思うに任せず、卒業式もなかったのではないのでしょうか。

短大入学時は2021年。入学式もなかったはず。オンライン授業と対面授業が並行し、クラブ活動は停止、多くの学生がアルバイト先に選ぶ飲食業もほぼ休業状態でした。1年遅れのTOKYO2020オリンピックは無観客で行われました。ワクチン接種をするかしないか、ワクチン不妊デマなどに悩まされた年でした。

学生は、コロナに翻弄された10代最後を過ごしています。仲間と集まって楽しむ青春らしい時間はあまりなかったのかもしれませんが。彼らの自由は、コロナによって大幅に制限されたものでした。本来なら、学校で、クラブで、アルバイト先で出会うはずだった仲間と出会う機会を奪われました。彼らは仲間を求めて、SNSに没入していったのでしょうか。

2020年の私の学生^{xiv}は「コロナの時代、もしネ

ットがなかったら、孤独で仕方がなかったはずで
す。ネットがあって良かった」と言っていました。
たしかに、そうです。コロナ下、彼らの楽しみ
の中心はネットの世界でした。

2020年から2022年の3年間、“普通の青春”
がなかった学生にとって、自分を表現する場や人
との交流をする一番身近な場はネット空間だっ
たのです。彼らの過ごした時間に想いを巡らせ
てみれば、「実生活での会話」が制限される中
での青春で「実生活での会話」そのものを作
れる状況ではなかったのです。

「人と接触するな」「ソーシャルディスタ
ンスを取れ」「多人数で会ってはいけない」「食
事は黙食で」「旅行はダメ」「コンサートは中
止」。

彼らはネット空間でこそ、自由だったの
です。「この授業はソーシャルメディアのよう
なものでした」と書いた学生は、「実生活で自
由にモノが言えなかった」のではなく、「実生
活」が自由ではなかったのです。

若い世代が、コロナ下で自由な青春を送
れなかった事。私はこの点を理解しなくて
はいけないと思ひに至りました。

そして同時に、大人にとっては、若者に
リアルな生活での会話の楽しさを伝えるこ
とも、大切な役目だと気が付きました。

私は「SNSを楽しむのは大いに結構。」
と受け止めた上で、「でも、その先に、リア
ルな楽しい生活があるのです」と伝えたい
と考えました。

さらに。ネットの言論空間は「フラット」
だと言われています。一方、実生活では、
上下関係や立場の違いなどがあり、なか
なか自由な発言をすることが難しいもの
です。例えば、クラブでは先輩後輩が
いて、会社では上司部下という上下関
係があり、総務部と経理部と営業部など
という立場の違いがある、そんな中でど
こまで、自由にモノが言えるのか。

「ソーシャルメディアで自由な会話」を
楽しんだ学生が、果たして「実生活での
会話」を楽しめるのか…。

とはいえ、この点については、私はあ
まり悲観していません。

ここまで自覚的に、「自由に意見が言
えて仲間の意見をたくさん聞くことが
でき、有意義な時間でした」と言える
こと自体が、成長の証しなのです。こ
の学生にかぎらず、多くの若者にと
って、自由が制限されていたこの期
間、SNSでの交流は実生活につな
がる鍛錬の場ともなっていたのでは
ないでしょうか。

コロナが収束しつつある今、私の学
生には「リモートではなく対面で」人
と人が語り合う楽しさも、味わっ
てほしいと思います。

7. 「玉音放送」から学んだもの。

① 「玉音放送と二人の少年」

天皇の声による終戦の詔勅。ラジオで
天皇の声「玉音」を聴き、日本人は終
戦を受けいれました。玉音放送は、
メディア史に残る放送でした。

戦争中の言論統制はメディアを様々
に統制しました。内容の制限もさり
ながら、新聞や雑誌などはその紙数
も制限されました。ところが、ラ
ジオは情報伝達の重要な機器とし
て、上意下達のツールとして、戦争
が進んでも金属供出の例外として各
家庭に置かれていました。そのおかげ
で、降伏の情報を速やかに全国民に
共有させるという大命題は、危うい
ながらもしっかりと遂行されたので
す。

ジャーナリストの田原総一朗さんと
元民間放送連盟会長の広瀬道貞さん
はともに小学5年生で終戦を迎え、
それぞれの郷里である滋賀県の彦
根と大分県の日田で玉音放送を聞
いています。

田原さんは「当時はラジオの無い家
もあって、ラジオのある我が家に
みんなが集まってきて放送を聞
いたが雑音が多くてさっぱり意味
が分からなかった。結局、戦争に
勝ったのか負けたのか、分からな
かった。『堪え難きを耐え、忍び
難きを忍び』というのだから、こ
れからも戦うのだろう、という
話も出たが、勝ったのか負けた
のか、で、そのうち大人たちが喧
嘩をし始めた。その後、役場の
人が来て、日本が負けたと知
った」と言います。

広瀬さんも「大切な放送があるとい
うから、ラジオの前に行ったの
だけ、それが、よく聞き取れな
かったんだね。さっぱり分からな
かったんだね。」と振り返ります。

田原さんは「この日を境に、戦争を
正しいと言っていた大人たちが『
あれは悪い戦争だった』と180
度違う事を言うようになった、
大人や偉い人のいう事は信じ
られない」と思ったそうです。
ジャーナリスト精神の誕生です。

雑音だらけのアナログ放送を聞
いた広瀬さんは、後に朝日新聞社
を経てテレビ朝日の社長を務め、
民放連の会長に就任。2000年
代には民放連会長として、日本
の放送のデジタル化推進のリー
ダーとなり、NHKや産業界と共
に10年がかりの地上デジタル放
送移行の国家プロジェクトを成
功に導きました。

② 「戦争は終わらせることが難しい」

多くの国民にとって聞き取れな
かった『玉音放送』ですが、その
日の夕方、新聞に玉音放送の内
容、ポツダム宣言受諾が掲載さ
れ、多くの国民は

あらためて日本が降伏したことを、確認することになりました。

学生は、国家が戦争の終わりにどのように情報を発信するのか、ウクライナ戦争と引き比べながら学ぶことになりました。

授業では、『玉音放送』昭和20年8月15日「大東亜戦争終結に関する詔書」^{xv}の、原初のコピー、そして、ルビを振った原稿、現代語訳^{xvi}（西日本新聞2014年8月15日朝刊・郷学研究所 安岡正篤記念館の助言による）を、学生と音読しました。本来なら歴史まで深く入って説明をし、当時の天皇の在り方などを解説したいところですが、そこまでの時間はありません。ですが、まずは「原典にあたれ」です。原文はA4一枚に収まる長さですが、内容は多岐にわたります。学生は一文一文丁寧に読んでいきました。

そして、詔書が出来上がり天皇が録音し、玉音放送が無事放送されるまでを「日本の一番長い日」^{xvii}（半藤一利）（テレビ朝日『スクープスペシャル』）で、振り返りました。学生は詔書の原稿ができるまでの過程に興味を持ちました。国の命運をかける中で、一語一句練り上げていく緊張感。まとまらない会議。「好転せず」という言葉にこだわった阿南惟幾陸軍大臣の例を詳しく紹介すると、「たしかにそうだろう、と思う、日本人みんなが納得してポツダム宣言を受諾することは難しかっただろう」という声も上がりました。

リアクションペーパーから抜粋します。

◇玉音放送は「堪え難きを耐え、忍び難きを忍び」という文章しか知らなかったの、今回の授業プリントで、当時と同じ文章、現代の訳を見て、こんな内容だったんだと思いました。内容は宣言の受諾についてと終戦についてだけだと思っていたら、国民についてもたくさん書かれていて驚きました。また、この玉音放送がされるまでに事件があって、とても言葉では表せない程の大変さがあったことがわかりました。さらに、私は今まで玉音放送が生放送で行われていたと思っていたのですが、録音であったことを初めて知り、今日一番驚きました。また、（終戦のことを）国民がしっかり（理解）できるように、玉音放送というラジオ音声だけでなく、午後新聞でも記し、文章という2つのメディアを使っていたのは、誰もが理解できてとても良いなと思いました。新聞各社が同じ内容だったけど、毎日新聞の西部本社だけが二面が白紙だったというのをみて心が痛みました。

◇玉音放送をするまでの裏には文章作成の大変

さ、クーデターがおこったり、戦争をやめるにも、こんなに大変だったなんて知らなかったし知れてよかった。（天皇の声を）神の声と言われて違和感を持ったが、玉音放送がされるまでの裏側を知って、神の声だったんだな、と感じた。国民・臣民を納得させるには、天皇が直接言わないと納得しない時代だったんだと感じた。

◇（詔書の文案作成の過程で）、属国になっていいのか、などの議論が起きているから「日本の一番長い日」だと思いました。戦争を終わらせるのは何より難しいことがわかりました。ウクライナとロシアも早く終わってほしいと思います。

今のロシアと日本を重ね合わせているのかな意見も多くありました。学生なりに一生懸命、ウクライナ戦争を通して戦争の姿を考えています。

◇77年前、玉音放送を通して日本国民に敗北が伝わりました。もし、日本がアメリカとの力の差をもっと早く知っていたら、戦争はおこらなかっただろうか。メディアが発達した現在、ロシアはアメリカ含めたNATOと敵対関係にあります。事実かは分かりませんが、兵士の命や国民の生活より、自国のプライドを優先して勝てもしない相手に牙をむき続けています。日本も力の差を知っていたのに、プライドが戦争につながったのでしょうか。

◇（玉音放送ができるまでを知って）昔の日本人の方が、自分たちで何かをしようと強い気持ちを持っていたのではないかと思った。誰かが犠牲にならなければ、戦争は終わらないのかと悲しい気持ちになったと同時に、戦争は国も利己的な意志により始まり、それに抵抗する為に反撃するという終戦まで途方もないサイクルがあるのではないかと思った。

◇玉音放送の内容を読んで、日本が仕掛けた戦争で、しかも、宣戦布告もしなかったのに、なぜあたかも日本側が被害者であるかのような事を言っているかわからない。天皇が自らアメリカ人に頭を下げたと話を聞いたことがあるが、元は自らの国が犯した過ちだから当たり前行為だと思う。国が犯した罪を代表して謝罪し、相手の話を聞くことがこの時の仕事であったと思う。『当たり前』のことをまともに語れる人が少なくなかった故、『当たり前』ができた天皇が良く見えただけな気がする。天皇だろうが、総理だろうが、大統領だろうが、庶民だろうが、誰もつらい思いはしてはいけないと思う。だから戦争は本当に良く

ないと思う。

8. 暴力と言葉の力

① 「暴力をきちんと批判する」

日本近現代史の研究者であり、戦争の記録を取材し続けている作家の保阪正康さんは7月10日、安倍元首相の銃撃事件を受けて、朝日新聞のインタビュー^{xviii}にこの様に答えています。

「私はウクライナを支持しますし、ウクライナは被害者だと思います。ただ、こと戦争になると、暴力で抵抗しなきゃいけないという側面があります。どちらかが一方は正しい、という議論は、どちらかの暴力は正しいという議論に転じていき、やがて、暴力はいけないという基本を見失ってしまう。そうした危険性は排除できないと思います。」

「言論への暴力が起きたときに大切なのは最初にきちんと批判する、という事ではないでしょうか。決してあやふやにははいけません。わたしたちのごく普通の、常識的な考えが、暴力の連鎖を止めると思います。暴力にさえぎられることなく、言いたいことを言える権利がある、そのことをしっかりと自覚し続けなくてはなりません」

この授業のリアクションペーパーです

◇保阪さんの記事の最後の部分を見てすごく納得するものがありました。今、私達のような若者がどうしなくてはいけないかが、言語化されていて、すっと頭に入ってきました。

◇どんなに分が悪くても、暴力で解決しようとする考えは間違っていることを、今回の安倍元首相の事件で改めて学んだ。言いたいことをしっかり言う事を自覚しなくてはいけない。

◇暴力で支配することはできないという強い意志を持つことで、国内で起こっている事件を事前に減らすことにつながるのではないかと思います。

安倍元首相の銃撃事件の衝撃と同時に、今期、学生は、ロシアの戦争を通して、暴力によって言葉や自由が抑圧され、人権が蹂躪されていく姿を目の当たりにしました。

彼らは、そういう事態を引き起こさないためには、自分には何が出来るか、考えるようになっていきました。

② 「言葉の力」とメディア

授業は前期で終わりましたが、2022年は衝撃的な年でした。ジャーナリストの田原総一郎さんのブログ^{xix}を抜粋引用します。

「日本にとって、世界にとって衝撃の1年であった。2月24日、ロシアによるウクライナ侵攻が始まった。僕はこのメルマガで書いた。『もし武力行使という事態になれば、多くの人が犠牲になる。人間はそこまで愚かではない、そう信じたい』と。しかし、ロシアの武力行使は、現実のものとなり、さらに今も停戦の気配さえ、見えないのである。その間多くの人々の命が、失われているのだ。21世紀にこんな戦争が始まるとは……。人間は歴史に学ばないのか。いつまで過ちを繰り返すのか。」

さらに、日本国内で衝撃的な事件が起きた。7月8日の安倍晋三元首相銃撃である。安倍さんはよく話を聞く方だった。僕とは考えの違いは多々あったが、会えば真剣に話し合うことができた。犯人の動機から、次第に旧統一教会問題が浮き彫りになった。しかし、やはりこれだけは言いたい。どんなに社会への不満があっても、暴力を手段としては絶対にいけない。僕は何度でも、そう訴えようと思つて誓った」

「ところが、11月29日、僕にとって絶対に許せない事件が起きた。東京都立大学教授の宮台真司さんが襲われたのだ^{xx}。(中略) 宮台さんは幸い回復され、「どんな理由があれ、暴力でなんらかの表現をしようとしたのか、わかりませんが、効果としては表現をふさぐ機能を果たす。それを許せない」とインターネット番組で語った。(中略) 宮台さんも僕も、覚悟を持って言論活動をしている。それに対してもし反対意見や、異議があるのならば、暴力ではなく『言論』で闘うべきではないか。衝撃的な事件が続いた2022年だったが、僕はそれでも日本人を、人間を信じたい。」

保阪さんと田原さんは日本の言論界の重鎮です。戦争を知っている最後の世代が、暴力に対抗するのは言葉の力だと明言しています。個人の意見を自由に表明できない社会、言論統制が国の行き先を誤らせてしまう事を、身をもって知っているからこそ、折に触れ「言葉の大切さ」を説いているのです。

そして、この二人の「言葉」を伝えたものは、新聞であり、ネット記事です。まさにメディアを通して、私たちは二人の言葉に触れることができているのです。ウクライナの市民の声を伝えているのもメディアです。

「言論の自由」や「表現の自由」はけっして大上段に構えたものではありません。普段の生活の中で「言いたいことを言い、人の話も聞く」、それが第一歩だと思うのです。日々の積み重ねです。

私は、その上で、氾濫する情報に振り回されないように、メディアの特徴や役割を理解し日々の生活に活用する、そんな毎日の生活が、自由で平和な社会を維持する礎となると考えています。

最後の授業のリアクションペーパーです。メディアに真剣に向き合う学生の姿が浮き彫りになっています。

◇授業を通してメディアの良さ、悪さを改めて痛感しました。簡単に知りたい情報が得られる反面でメディアに依存しているということ。何をすることも今ではスマホが必要となっている。友だちと一緒にいてもスマホをいじっている。コミュニケーション不足で人対人で話すのが苦手意識を持っている人も多くなっているのではないかと思います。

◇授業を通して改めて感じたことですが、人それぞれ考え方、感じた事、印象に残っていることが違います。10人いれば10通りの感想があるように、メディアには様々な形、媒体がなければならぬと考えました。

◇（憲法14条は「すべて法の下に平等である」としていますが）今の日本は差別に溢れていると思います。よく「以前よりは…」と耳にしますが、本当にそうでしょうか？。障がい者、ジェンダー、人種、経済面、外見、差別はまだまだあると思います。本日のテーマにもあるように「自由とは何か」。それは何からも差別されずに、好きなようにテレビを見たり、メディアを使え、自分らしくあることだと考えます。メディア論で学んだことを生かして、自由とは何なのか、人は何から自由になれるのか、情報を得る方法などを学んできたいと思います。

まとめに。

リベラルアーツとは『人が自由に生きる術』。コロナ禍3年目の講座では、せっかくリベラルアーツセンターの科目として「メディア論」を学ぶのだから、「人が自由に生きるとは何か、一緒に考えてみましょうね」とスタートした授業でした。

昨年度の授業終了後、「掌の通信機器に自分の人生を支配されていることに恐怖を感じる」と訴えた学生がいました。ところが、今学期「恐怖があることを前提に、ネット社会を生き、新しい未

来を作りたい」と主体的に新しい時代を生きようとする学生と出会いました。

昨年私は日本は77年間戦争を経験せずに済み、戦争を直接語り継ぐ人がいなくなった今、戦争を俯瞰的に学びなおす必要がある、と思いました。

しかし、今やそれはまるで夢のような話、過去のこととなりました。ロシアの暴挙はウクライナの市民を蹂躪し、エネルギー、食糧安保を脅かし、世界中を混乱に陥れました。戦時下では「言論の自由」「人が自由に生きること」などはどこかへ消え、平和は一瞬にして消え去ることを目の当たりにすることになりました。

「自由な新しい社会に羽ばたきたい」と願う私の学生は、現実の戦争を教材にメディア論を学ぶことになってしまいました。彼らは毎回、「戦争が早く終わりますように」と唱えていました。彼らと同じように私も、一刻も早い戦争の終了を祈りたいと思います。

謝辞 この稿を書くにあたり、小棹理子先生、上野敦史先生、兵頭潤さん、大槻裕志さん、周防千華子さん、大澤有紀さん様に様々にお世話になりました。御礼申し上げます。

引用文献 等

① 1987年4月スタート『朝まで生テレビ!』昭和・平成・令和をまたぐ深夜討論番組。テレビ朝日系列で毎月月末金曜日深夜放送。司会：田原総一朗 進行：渡辺宜嗣・下平さやか。政治経済・天皇・原発・ジェンダーなど『日本と日本人を論じる』をテーマに、各界のキーパーソンや保守からリベラルまで老若男女が一堂に会し討論を繰り広げる。筆者は2013年からプロデューサーを務めている。

② 参議院HP ゼレンスキー・ウクライナ大統領による国会演説
<https://www.sangiin.go.jp/japanese/ugoki/r4/220323-2.html>

③ 村山談話：外務省HPより 村山富市内閣総理大臣談話「戦後50周年の終戦記念日にあたって」（いわゆる村山談話）平成7年8月15日

https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/danwa/07/dmu_0815.html

④ 安倍談話：首相官邸HPより 平成27年8月14日 安倍晋三内閣総理大臣談話
warp.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/10992693/www

kantei.go.jp/jp/97_abe/discourc/20150814danna.html

⑤ 匿名率：湘北短期大学紀要 42号『2020年コロナ禍で学生はメディアとどう付き合ったのか』鈴木裕美子 総務省情報通信白書インターネットリテラシーに関する利用者調査

⑥ 改正刑法のうち侮辱罪の厳罰化についてのQ & A法務省HP
https://www.moj.go.jp/keijijil/keijijil2_00194.html

⑦ 国葬についての補足：安倍晋三元首相の国をめぐり世論の賛否が割れた。首相経験者としては1967年の吉田茂氏以来戦後2例目となる。国会に諮らず閣議決定で決まった国葬に関して岸田文雄内閣の支持率は、各社の調査で軒並み急落した。

⑧ クイーン・エリザベス2世：2022年9月8日に96歳で亡くなったイギリスのエリザベス女王の国葬が19日ロンドンのウェストミンスター寺院で行われた。イギリス史上最も長い70年もの間君主を務めた女王は国民の敬愛を集め、葬儀の前に女王の棺は一般市民に公開され、多くの国民が弔問に訪れたため、待ち時間は長い時で24時間を超えた。葬儀には国内、アメリカのバイデン大統領、日本からは天皇皇后両陛下など、世界200か国・地域から約2,000人が参列した。葬儀の様子は生中継され、世界中の人が女王との別れを惜しんだ。1953年、世界で初めてテレビ中継された戴冠式に始まり、毎年クリスマスにはテレビを通じて国民にメッセージを送り、女王に関する行事は軒並み視聴率を誇った。2012年ロンドン・オリンピックのオープニング映像では007と共演、2022年6月の在位70年を祝う「プラチナジュビリー」の映像ではくまのパディントンとも共演。戴冠からその治世の終わりまでまで威厳とユーモアを兼ね備えた女王はまさにテレビの申し子だった。

⑨ 読売新聞 2022年10月13日
新聞週間特集記事「本社世論調査」
「新聞報道「正確」7割 安倍氏銃撃 搬送写真の掲載「妥当」69%」より引用

⑩ KDDIの障害 朝日新聞 2022年7月5日
(火)朝刊など各紙。ニュースなど参照

⑪ 2022年4月23日 知床遊覧船「KAZUI」の沈没事故。乗客・乗員全員26人が死亡・行方

不明となる。

⑫ 朝日新聞 2022年6月15日(水)朝刊一面から2面の特集記事より引用
「ビッグテック膨張する権力」
「私のデータ 利益の源泉。記者の自宅も有人関係も蓄積。サイト訪問 0.001秒で広告入札。プライバシー保護へ制限強化」

⑬ 「テレビ・パズル」2007年度～9年度 視聴者と一緒にテレビについて考えようとして企画されたテレビ朝日創立50周年記念プロジェクト『東京大学とのメディアリテラシー共同研究ろっぽんプロジェクト』の中から生み出されたワークショップ。紙とペンがあれば経験も知識も異なる人達が一緒になってテレビについて話し合うことができる。筆者は、『ろっぽんプロジェクト』のテレビ朝日の責任者を務め、現在、湘北短期大学のメディア論を統括する上野敦史講師とともに、学校や市民講座でワークショップを行った。東京大学の責任者は大学院情報学環の水越伸教授(当時)。

⑭ コロナ下メディアに親しむ：湘北短期大学紀要第42号『2020年、コロナ禍で学生はメデ後どう付き合ったか』

⑮ 玉音放送 『大東亜戦争終結に関する詔書』昭和20年8月15日 宮内庁HPより
<https://www.kunaicho.go.jp/kunaicho/koho/taisenkankei/syusen/syusen.html>

⑯ 現代語訳 西日本新聞社 2014年8月15日朝刊より。「終戦の詔書(しょうしょ)は、1945年8月14日の御前会議でポツダム宣言受諾が決定されたのを受け、発布された。翌15日には、昭和天皇が詔書を読み上げた玉音(ぎょくおん)放送がラジオで流れた。郷学研修所・安岡正篤記念館(埼玉県)の助言を受け、全文と現代語訳を紹介する」

⑰ 「日本の一番長い日」:
◇「日本のいちばん長い日」半藤一利著。(文藝春秋)玉音放送に至る一日を取材。1965年初出。昭和の名著で大ベストセラー。映画化もされ今なお読み継がれている。

◇テレビ朝日「ザ・スクープ」2011年8月14日放送 ～「日本の一番長い日」の真実 誰も知らない“玉音放送”～ MC:鳥越俊太郎・長野智子 プロデューサー原一郎 制作(テレビ朝日・東京サウンドプロダクション)「メディアの観点から史実に迫った」として2011年の

ギャラクシー奨励賞を受賞。

⑱ 朝日新聞 2022年7月10日（日）
「言論への暴力 連鎖の歴史 保阪正康さんに
聞く 暴力見止める危うさどの時代も」から引用。

⑲ 田原総一郎 公式サイト
support@taharasoichiro.com

【田原総一郎】「戦争、襲撃……衝撃の2022年末
に誓うこと」より抜粋

⑳ 2022年11月29日、東京・八王子市の都立大学・南大沢キャンパスで、社会学者で教授の宮台真司さんがキャンパス内で男に刃物のようなもので首などを切りつけられ全治およそ1カ月の重傷を負った事件。警視庁は2023年2月16日、死亡した相模原市南区の無職の男を容疑者と特定したと発表した。

2022 3rd year of the corona disaster
Students and the media about war and freedom of expression
～Russia's invasion of Ukraine, the shooting incident of former Prime Minister Abe～

Yumiko SUZUKI

【Abstract】 2022, the third year of the corona disaster. Russia's invasion of Ukraine, the shooting incident of former Prime Minister Abe, and the establishment of "insult" for slanderous slander on the Internet. Students considered war and peace, freedom of expression, etc. as their own issues. In addition, in the group work that is held every year in this course, we encourage students to draw a diagram of the relationship between me and the media. It seems that the figure of the student who is in the whirlpool of information has been highlighted. Document how students interacted with the media in a year full of shocking news.

【keyword】 media, coronavirus, war, Ukraine, freedom of expression, SNS、